

巻 頭 言

東京女子医科大学医学部外科学（第2）講座

カメオカ シンゴ
亀岡 信悟

私が大学を卒業した1974年当時は、70年安保の学生運動の余波で、教授と医局員が対立していた大学教室が少なくなかった。今と違い、医学部の学生は卒業と同時に将来専攻する分野を決め、その科に入局し、卒業研修を始めるのが普通であった。私は外科を専攻すると決めたにもかかわらず、母校の外科教室は混沌としており、相談した諸先輩の誰もが入局には否定的意見で相当悩んでいた。折しも「医事新報」が東京女子医科大学の医療練士制度を大々的に取り上げ、希望に燃える卒業生のための画期的な卒業研修制度として紹介し、出身大学の枠にとらわれない全国募集の記事が目にとまった。心研の榊原任教授と消化器病センターの中山恒明教授が中心となり設立された全国に先駆けた新制度であった。

このような経緯で、卒業後直ちに女子医大の医療練士を受験、採用され、6年間の研修を開始した。早いもので、あれから39年になる。46歳の時に外科学（第2）講座の主任教授に就任し、あっという間に19年の歳月が過ぎ去った。主任教授の主なdutyは臨床、教育、研究であるが、臨床講座の主任教授は外来や手術などの臨床業務の合間に教育、研究をこなさなければならない点が基礎とは大きく異なる。私は当初ブラックジャックのように腕が立つ外科医を目指していたのだが、主任教授を引き受けたからには、加えて学生や研修医の教育と医局員の研究指導の義務も全うしなければならず、特に先代の濱野恭一教授からは学位に関して「希望者には取得させるのが主任教授の務め」との申し送りがあった。

主任教授就任当時女子医大では、すでにテュートリアル教育が導入実施され、系統講義はなくなり、テュートリアルの割り当ても教授は外されたので、学生教育の負担はそれ程ではなかった。2004年の新卒業研修医制度導入までは毎年10名前後の新入医局員があったので、彼らの研究指導には相当な情熱と根気を要した。初期は私自身が直接指導したが、現在の准教授に当たる教育スタッフが徐々に実力をつけるに従い、彼らが次世代の指導に当たるという、講座の一つの流れ（慣例）ができあがった。これこそ私が目指したものであり、学位指導も教授から准教授、准教授から講師へと移譲する形が根付いた。

結果、1995年～2014年9月現在で、外科学（第2）講座在籍者の学位指導は40名（医局員以外の学位指導を含めると56名）、論文数は539編（うち英文102編）、学会発表が1,902回（うち国際学会96回）の業績を積み重ねることが出来た。この特集号掲載論文により、この数字はさらに追加される予定である。振り返ってみると、勤勉とは言い難い私としては、「よくやってきたものだ。」と自画自賛したい心境である。

笛吹けど踊らず。指導者が繰り返し促しても、それぞれの事情で論文が書けない者もいるが、論文執筆の一つのきっかけになればと、今回本学学会雑誌編集委員会に特集号を組ませて戴くことを申請した。学会発表まではできて論文にまで漕ぎ着けなかった者もようやく重い腰を上げ、執筆を開始した。相乗効果により投稿論文数は予想を大幅に超えて1冊では掲載不可能となったため、2冊に分冊しての出版という形となり、編集委員長には随分ご迷惑をおかけした。この場を借りて、お詫び申し上げる。また、査読して戴いた多くの先生方（複数編の査読を担当戴いた編集委員もあったと伺っている）には、外科学（第2）講座のためにお忙しい中、多大な時間を割いて戴く結果となり、誠に申し訳なく思っている。

私の最終章を飾るにふさわしい内容の第二外科特集号が発行される運びになったことは、望外の喜びである。また上梓に際し、改めて医局員の努力に敬意を表し、編集委員会各位の温かい御支援に対して重ねて心より感謝申し上げます。